

ほっとらいん
ふるむ
ほんごう

ケアと建築でつくる「自分を取り戻せる場所」 「世界のマギーズセンターの建築とサポートティブケア」開催

去る9月28日(月)、東京都江東区にて、シンポジウム「世界のマギーズセンターの建築とサポートティブケア」がギャラリーエークワッド(川北英館長)の主催で開催された。マギーズセンターとは、「がん患者と支える人々が自分の力を取り戻すための居場所」であり、47歳で乳がんと診断された英国の造園家、故マギー・ジェンクス氏らが、1996年にエジンバラに設立したのが始まり。現在、英国内に15か所、香港に1か所ある。

シンポジウムには、マギーズ・エジンバラのセンター長で看護師のアンDRY・アンダーソン氏(通訳・重松加代子氏)、NPO法人マギーズ東京の共同代表で訪問看護師の秋山正子氏、同じく共同代表でテレビ局報道部記者の鈴木美穂氏、マギーズ東京理事でstudio1代表の山崎亮氏が登壇。医療や建築関係者など約120名が集まった。

「患者 ではない 1人の人に戻れる場所」

アンダーソン氏は、ソフトとハードの両面からマギーズセンターを紹介した。がんと診断された本人だけでなく、家族や友人や医療関係者に対してもサポートを行なっており、がんの種類やステージ

によらず、予約なし・無料で利用できる。看護師や臨床心理士など専門職による個別の相談支援のほか、必要に応じて栄養や料理、ヨガなどのコースも提供する。がん専門病院に近接し、その建物は著名な建築家が設計した個性的で温かな空間である。こうした環境は、人が「患者」ではない1人の人であるために重要な役割を果たしており、「マギーズセンターは、建築とケアの力、両方によってできている」と強調した。さらに、寄付金による運営も大きな特徴だという。

マギーズセンターを日本にも

秋山正子氏は、マギーズセンターを日本につくる活動を始めた動機と経緯について語った。訪問看護師として長くがん患者と家族に接してきたなかで、もっと暮らしの近くで気軽に相談できる場所があればと感じていたところ、国際がん看護セミナーでアンダーソン氏と出合い、マギーズセンターを知ったという。その後、英国本部との交流を重ね、2011年にマギーズセンターをお手本に「暮らしの保健室」を新宿区に開設。がんを含む医療や介護、暮らしの困りごとの相談を受けている。そこへ鈴木美穂氏が訪ねてきたことで、立場や世代を超えた仲間が集

まりNPO法人マギーズ東京を立ち上げた。

秋山氏は、「大切なのは本人が自分の力を取り戻せるように手伝う相談支援の形であり、その実現に向けて支援者の皆さんと一緒に歩んでいきたい」と結んだ。続いて発表した鈴木美穂氏は、2008年に24歳でがんになったとき、情報選択が難しかったことや、友人はいても孤独感で苦しんだ経験などが、今の活動につながっているという。治療を終えてすぐ、若年性がん患者団体などの立ち上げなどを行ない、2013年、患者団体や支援者の国際会議でマギーズセンターを知った。「ほしかったサポートはここにある」と感じ、秋山氏らとともに日本での設立に向けて動き出した。「患者さんや家族がほっとできる空間を提供し、がんになつていない人や社会全体にも存在を知ってもらえたら」と抱負を述べた。

環境が人に与える影響を重視

コミュニティデザイナーとして活躍する山崎亮氏は、マギーズセンターに着目した理由について、次のように発表した。19世紀の英国では、伝染病が流行すると10万単位で人が亡くなっていた。感染



症が蔓延しやすい不衛生な住宅環境が原因だったという。そこで宿泊住宅法や公衆衛生法がつくられ、前者はその後の住宅・都市計画法につながり、後者は、国家医療体制を担うNHSに発展した。その後長い間、建築と医療の考えは離れていたと指摘。ところがマギーズセンターは、環境が人に与える影響を意識し、建築を重要視している。100年以上別々に進んできた、心身の健康を支えるための方法論が融合していると述べた。

会場からの質疑応答ののち、今年東京都江東区に開設予定の「マギーズ東京」への期待と応援メッセージが交わされ、盛会のうちに閉会となった。

(写真・文/神保康子)